
儀式の夜

白亜零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儀式の夜

【Zマーク】

Z8089X

【作者名】

白里零

【あらすじ】

ある高校に通っている、女子高生の黒輝禮夜。いつもの様に退屈な日々を過ごしていた。

しかし、ある日を境にして起きる殺人事件。これからどうなってしまうのか…

01 (前書き)

初めまして。

初めて書く小説なので、誤字なども多かしませんが、読んでくれると幸いです。

予定が狂わない限り、土曜日に更新します。

曇っていた。

今にも雨が降り出しそうな梅雨空を黒輝禮夜は眺めていた。名前でよく勘違いされるが、一応女だ。

正直言つて、つまらない。何もかも。高校生活も思つたより楽しくなかつた。今行つてゐる授業の物理は特におもしろくない。この先生の授業は長いし同じことを何回も繰り返して説明する。しかも生徒いじめをすることで校内の生徒の中でも有名だ。かなりたちの悪い奴と言える。

こいつの名前は悪谷。勿論、生徒たちには嫌われている。正直言つて、眠い。今すぐにでも眠れる。

でも、こいつの授業じゃ眠れない。理由は…

「おこーそこで寝てはいるのはだれだ！河崎かー河崎、お前にこの問題解いてみろー！」

「えーえつ…と…」

「まあこいつになるとなるからだ。ちなみに河崎のフルネームは河崎伸太わさきしんたである。

「もう、いい！後で職員室に来い！…じゃあ黒輝、お前答えてみろ！」

こっちに矛先が回つてきた。ぼけーっとしていたからだろうか。とりあえず立つ。しかし問題なんて聞いて無い。黒板にも書いていない。どうやら悪谷が消したらしい。この野郎。

禮夜は心の中で悪谷に悪態をついた。しかし今はそれどころではない

い。二つの問題には答えないと評定を下されるのだ。そのため問題には答えないとやばい。でも聞いて無かったから答えない。この場合せざうすればよこのだらう?

不意に田の前にブラックアウトする。でも一瞬のことだった。

「…正解だ。座つてよし。」

心底悔しそうにしながら次のページに入る。周りの生徒のささやかな歓声が聞こえる。

何が起こったのか意味が分からなくなるの、言われたとおりに座る。結局その授業で謎が解けることは無かった。

待ちに待つた放課後。いつもなら机と机の間に座るはずなのになぜ喜べない。テンションがいつもよつと上がらない。

「さよと禮夜、さつきの授業のときすいかつたね。かつこよかつたよ。」

そう話しかけてきたのは長瀬由梨だった。ながせやないつも意識が無くなつた時の授業だらう。

「いめん、由梨。ボクその時のこと覚えてないんだ。ところがあの時にボクは何をしたの?」

「はあ? あんた覚えてないの? 信じられない。本当に何も? あんた私をはじめようとしてる訳じやないよね?」

「うん。とこりかじれだけ疑うのや。」

禮夜がそういうと、由梨は溜息をつきながら簡単に話し始めた。

「そりや 疑うよ。…まあいつか。教えてあげる。本当信じられないよ、禮夜、あんた悪谷に当たられたでしょ？最初はあんた『惑つてたみたいに見えたんだけど、途中から…何て言うのかな…』そう、急に自信満々になつた感じつていつか…まあそこはいいや。その後、その消された問題の答えを言つたんだけ…その問題が大学生レベルの問題だつたらしいんだよね。だからみんなおおーつて感じで…まあそんなとこだ。」

「つまりボクが大学生レベルの問題をあの授業で答えたと。」

「簡潔に言つとね…てか私ががんばつて言つたことをそんな簡単にまとめないでほしいんだけど？なんかみじめでしょ。あ、それとね、今ほかの学校の女の子が行方不明らしくて……」

由梨の言葉を無視する。別にまとめようがまとめ無からうが由梨に関係する事じやない。それにそんなことは、まったくもつて問題じやない。

問題なのは意識が無い間にあの問題を解いたこと、そしてその記憶が全くないこと。これはどういうことなのだろうか？
しかしどうせ禮夜にとつては得となることだったのだから、別にそこまで気にすることでもない。

「まあ、いつかあ。」

「全然良くない！…」

「何が？」

「全て！」

由梨が勝手に怒っているのを禮夜は眺めていた。何がしたいのだろうか？怒ることによつて、何が変わるのであらうか？

禮夜は思考を止めると荷物をまとめて立ち上がつた。それに合わせて黒く長い髪の毛がかるく揺れる。

「禮夜？あんた何してんの？」

「帰る。」

「はあ！？あんた何勝手に帰るの…？」

またしても由梨を無視して廊下に出る。昇降口まで響いていた由梨の声は聞かなかつたことにしておいた。

禮夜は家に帰る道を歩いていた。禮夜の家はこの辺ではめずらしく和風の家である。何でも昔はこのあたりの大地主だつたらしい。しかし、それも昔の話だ。

「ただいま。」

返事は無い。当たり前だつ。

両親はある事件に巻き込まれ、七年前に他界し、ここまで育ててくれた祖父も去年他界した。

そのためこの家には禮夜一人しか住んでいない。

：一人と言つのとは違うが。一応何人かの使用人が住んでいる。し

かし今は休養をとらせていい。

今日は何もかもがめんどくさい。すぐに部屋に戻り、着替え、布団に入った。

結局あの授業の時に何が起きたのだろうか。

思考を始めるがすぐに中断する。

眠い。

そこから禮夜の記憶は無くなつた。

02 (前書き)

現実逃避をするために投稿しました。

次の土曜日も多分更新すると思います。

ふと気がつくと、部屋の中が明るかつた。いつの間にか眠ってしまったらしい。

時計を見ると六時三十分、朝が苦手な禮夜にしては早い。もうひと眠りしようと思つたが、完全に目が冴えてしまつていて、眠れない。音楽でも聞いて時間を潰そうかと思つたが、充電が切れていた。昨日充電をするのを忘れていた。

しうがなくテレビを見ていたが、面白い番組は無かつた。

時計を見る。今は七時。さつきから三十分しか経っていない。

仕方がないので、ジャージからセーラー服に着替え、学校の用意をし、家を出た。

外は明るかつた。

禮夜はあてもなく外を歩いてみる。

「何で一人の時にこんなに早く目が覚めるんだよ……今日は八時くらいに起きるつもりだつたのに。」

禮夜は朝に弱い。そのため七時半以降に起きるのは、最早日課となつていて。

なんとなく歩いていると、いつのまにか、学校の裏山に来ていた。高校に裏山があるというのも変な話だが、いつもは見ているだけだったが、今日はひょっと探検しようと思つて中に入った。

裏山に広がっている森林は思っていたよりも広く、まるで何かを追悼しているような感じだった。膨大な数の何かを。森林を進むと、奥に洞窟があった。覗いてみると、大人が五、六人くらいは入れそだつた。何故こんなところに洞窟があるのだろうか？何かに使つたのだろうか？

そういえばこの辺は戦争の時の防空壕がどこかに残つていると噂で聞いたことがある。その残骸なのだろうか？まさかこの山自体が戦争の産物だというのだろうか？もしも思つてゐる通りだつたらこの学校は何故こんなところに建てられたのだろうか？

不意に後ろから物音がする。

驚いて振り向くが、そこには何もいなかつた。探りたい気持ちもあつたが、ちょうど登校の時間になつてしまつてゐる。少し恨めしく思いながらも禮夜は裏山を後にした。

登校して数分後、河崎が話しかけてきた。

「ちょっと今時間あるか？」

「あるけど。」

「じゃあちょっと来い。」

何だらうと思いながらも河崎についていった。

しかし、ついていく最中、何故だか不穏な空気がした。何か悪いことが起きる…そう直感したのだ。理屈は無い。ただの思い違い、そう思ひたかった。

考え事をしながら歩いていたる、河崎の歩みが止まつた。そして、裏山の前だつた。

「お前、朝じりでただる。」

何故河崎がそのことを知つてゐるのかは分からぬが、不審に思つながらも質問に答へる。

「いたけど。」

「じゃあその近辺に洞窟があつたか?」

「あつたけど。それが……」

「どうしたのか?」と続けようとした時、いきなり河崎に殴られる。口の中で血の味がする。殴られたときこち切つてしまつたらしく。

「何だよ、いきなり……」

河崎は「ひつひを睨みながら言つた。

「はいはくとな。」

「は?」

「「はお前が来ていい場所じゃねえんだよ。」

河崎は「いいか、絶対近づくんじゃないよ。」と言しながら帰つて行つた。

禮夜はやつと見たものを思に出しながら、河崎のやつとおもでいた場

所を見ていた。

禮夜は時計を見る。

授業開始まであと五分。今から行かないと間に合わないだろう。しかし、禮夜は時間という概念に縛られるのではない。禮夜はためらわず、裏山に入った。

03 (前書き)

いいのといひ、朝寒いですね。布団から出たくなくなります。

朝に行つた洞窟まで行く。むつきと同じ道…一本しかない道を通り、この道を外れれば、ここから出るのは至難の業となるだろう。

朝に来た洞窟につく。洞窟の後ろからは同じように物音がする。何かが動いている音だつた。人間でなければいいのだが。

しかし禮夜の嫌な予想は对外当たつてしまつ。今回もその通りだつた。

物音のした場所、そこには制服を着た女子生徒がいた。と言つても鎖で身体を地面に繋がれていて、目と口には布が巻かれているが。禮夜は素早く布を外す。

「ちよつとじつとしていて。」

禮夜は制服を漁る。スカートのポケットに、小刀が入つていた。禮夜はそれを取り出すと、日本刀のように使って、鎖を切つてしまつた。普通、小刀で鎖は切れない。でも禮夜は剣の達人である。小刀で鎖を切ることなど簡単だ。

女生徒を解放する。ブレザーモードの制服。禮夜の通つている高校の生徒ではないらしい。

「キミ、名前は?」

女生徒は泣いているので答えよつとしない。ここで禮夜は質問を変える。

「一人で歩ける?」

この質問には泣きながらだが首を縦に振り、立ち上がる。

裏山を出て少女を警察署に預ける。親がすぐに迎えにくるらしい。警察からの質問は適当に理由をつけて切り上げた。

警察署から出た時には、すでに一時間目の授業が始まっていた。学校に向かいながら考える。

禮夜の直感は当たつてしまつた。しかし、これだけで終わるとは限らないのだ。もしかしたら何か重大な事件が起こるかもしれない。しかし禮夜には止める力がない。今はそれが起きないことを祈るばかりなのだ。

そんな風に思いながらも学校へと向かつた。

04 (複数形)

「の原田君」です。

やつぱり早く寝たほうがいいんですね。

放課後、由梨に話しかけられる。

「ちよつと禮夜、何で今日遅れてきたの? つてちよつとあんた、顔どりしたのー? ちょっと見せてー。どりしたのよ、これ。」

最初は答えるのを渋っていたが、あまりに由梨がしつこいので、思わず今朝のことを言ってしまった。

すると、由梨はこきなり立ち上がり机を殴りつけた。机は派手な音を立てる。

教室にいた生徒たちがぎょっとしてこっちを見た。

「河崎め… 女子を殴るとほ… しかもよりこもよつて禮夜を…」

「お、おー… 由梨…」

「絶対許さんー…ぶちのめしてやるー。」

由梨は唸るようにいいながら、教室を走つて出て行った。多分河崎のところに向かつたのだろう。由梨は一見弱そうに見えても、実際は柔道の黒帯を持っている。男子でも柔道で由梨に勝てる者はいない。

止めなければどうなるのだろうか。

一つだけ分かつてているのは河崎が大怪我をするということだけだ。ところとは、その前に由梨を止めなければならない。

しかし止めるにしても由梨と河崎はどこにいるのだろうか?

そう悩んでいると、急に教室の扉が開いた。そこから入ってきた一人の男子生徒が興奮した様子で言つ。

「おい！河崎と長瀬がガチバトルするかもしれないぞ！」

それを聞いて、教室にいた生徒はその男子生徒にびっくりしているのかと
聞いた。男子生徒が簡潔に校庭と言つと全員我先に、という
感じで校庭に走つて行つた。こんなに早く騒ぎになるなんて思わなかつた。このままでは警察沙汰になつてしまつ可能性が高い。それほどに今由梨は怒つているのだ。こんなこと。

一刻も早く行かなれば。

それだけ考えて禮夜は窓に駆け寄り、二階の窓から飛び降りた。
驚異的な身体能力を生かし、綺麗に下の地面に着地した禮夜は、二
人がいるという校庭に向かつた。

校庭では由梨が河崎の胸倉をつかみ何か怒鳴つていた。何を言つて
いるのかはここからでは分からぬが、一人とも、ひどく興奮して
いるのは確かだ。

このままでは本当に警察沙汰…傷害事件に発展してしまいかもしれない。そんなことになつたら当事者は勿論、この学校まで評判が落ちてしまう。この学校は日本でも有名な名門校なため、そんなことになつたらどうなるかは目に見えている。

しかし、そんなことは何も考えていないのか、周りで見ている生徒はおもしろがつてゐるようだつた。

ここまで考えて、ふと河崎の右手を見た時、禮夜の顔色が変化した。自分でも青くなつてゐるのが分かる。河崎の右手、そこには…カッターガつた。ご丁寧にも新しい刃に変わつてゐる。

新しい刃に変わつてゐる。…つまり、もともと誰かを傷つけるつもりだつたのだろうか？

しかし今はそんなことはどうでもいい。いつ河崎があれを振り上げ

るか分からぬのだ。何より、まだ周りが気付いていない。由梨もだ。あのままでは避けるに避けられないだろつ。

禮夜は一人のところに向かつて氣付かれないようにゆっくりと近づきだした。走つてもよかつたが、禮夜に気付いてカッターで由梨が刺されても困る。禮夜が移動している間も一人は言い争いを続けていた。

あと数十メートルのところまで来たとき、河崎が何か言い始めた。

「… うつせえよ。」

「… 何？」

「うつせえつて言つてんだろ… さつきから黒輝のことばっかり言いやがつて… うぜえんだよ！」

そう言いながらカッターを由梨に向かつて振り上げる河崎。ここで由梨や周りの生徒もカッターの存在に気付き始めた。

由梨はカッターを見て後ずさりした。しかし河崎がその距離を縮める。禮夜はここで走り始めた。

校舎側がさつきから騒がしい。何をしているのだろうか？

「さつさと死ねよ… お前なんかこの世にいらねえんだよ…」

河崎が由梨に向かつてカッターを振り上げる。

由梨は逃げようとしたが、河崎のほうが行動は早く、先回りされてしまい、由梨は逃げることができなくなってしまった。

カッターが振り下ろされる。カッターは、ちょうど由梨の首筋… 頸動脈に狙いを定めていた。

カッターが由梨の頸動脈を切り裂こうとする寸前、禮夜は間一髪で間に合い、由梨を右手でつかみ、そのままいつしょに地面に倒れた。

とりあえず刺されてはいらないらしい。

しかし河崎はまだ由梨に狙いを定めていた。今度は由梨の顔に、もう一度カッターが振り下ろされる。

禮夜は反射的に右腕を由梨の顔の前に出して庇つた。その後、右腕が熱くなつた。しかしそれもつかの間、鋭い痛みが走る。

河崎が振り下ろしたカッターが禮夜の右腕を貫いていた。

傷口から血が滴り落ち、由梨の頬辺りに落ちる。由梨の頬に落ちたそれは首筋を伝い、地面に落ちた。

禮夜は左手で由梨の手をとり、無理やり立ち上がらせた。このままでは倒れたままになると考えたからだ。

遠巻きに見ていた生徒たちが禮夜の腕から滴り落ちる血に気付き、微かに悲鳴が上げた。

河崎は顔色を変えてよろよろと後ろに後ずさりした後、その場でどさりと音を立てて地面にしつりもちをついた。

由梨は顔に落ちた禮夜の血を触った後、カッターが貫いたままの禮夜の右腕をぼんやりと眺めた後に、その場にへたり込んだ。

「……血…血が出てる…早く止血を…」

由梨の声は震えていた。そのためうまく聞き取れない。しかし、ひどく心配しているのだけは分かった。

「大丈夫。」

とりあえず安心させるために明るい声音で言つと河崎の方を見た。河崎は恐怖の籠つた目で禮夜のことを見ていた。まるで化け物を見ているようだ。

「河崎。」

河崎は何も言わなかつた。いや、言えなかつたといつ方が正しいのだろう。

「本氣で殺そつとするのはよくないね。でもこれも立派な殺人未遂だ。まあ傷害事件になつちやつたけどね。」

そう言つたときに後ろから複数の足跡が聞こえた。振り向くと何人かの生徒と先生が来た。

「ちょっと、貴方達は何をしているのー三人とも職員室に…」

そこまで言つたところで先生が息を呑むのが分かつた。いつしょにいた生徒たちは悲鳴を上げた。全員、禮夜の傷を見ていた。右腕から滴り落ちた血は、校庭の砂に奇妙な模様を描いていた。その場の砂は赤黒い血によつて凝固し、そこだけ赤かつた。

「…職員室は結構です。とりあえず黒輝さん、保健室に行きましょう。長瀬さんもいつしょに来て下さい。川崎君はとりあえず教室に戻りなさい。」

禮夜はその言葉に黙つて頷くと、由梨に声をかける。

「由梨、行くよ。」

「…」

「由梨ー。」

それでも由梨は動かずに、禮夜の右腕を見て、がたがたと震えてい

た。禮夜は溜息をついてその場にしゃがんだ。

「由梨、ボクは大丈夫だよ。…一緒に行こう?」

「…」

由梨に左手を差し出すと、由梨は無言でその手を取り、立ち上がり、
た。禮夜は行く直前に校庭を見た。さつきまでのことが嘘のように、
そこは静寂に包まれていた。

05 (前書き)

本格的に寒くなつて来ましたね。地域にもよると思いますが。

私は寒いのが苦手なのに冬は好きなんですね。矛盾している気もしますが（笑）

「……それで、黒輝さんの怪我の手当ても終わったし、何があったのか教えてもらいたいの？」

保健室で手当が終わった後、禮夜達を保健室に連れてきた横峰羽智にさつきのことについて質問される。

「……」

禮夜はそこまで話したいことでもなかつたため、黙つていた。由梨はさつきから黙つたままだつた。ずっと自分の足元だけを見ている。その光景を見て、横峰は溜息をついて椅子に座りなおした。

「……どうかが話してくれないと教室に戻れないわよ。」

禮夜は横に座つてゐる由梨を見た。由梨はこつちも見ずこゝさつきと同じように、ただ下を見ていた。由梨が話す気配は一向に無い。それを見て禮夜は横峰の方を見て朝に起つたことからさつきの事件のことまで全部話し始めた。

しかしあの山が昔何だつたのかは聞かないで置いた。まだ聞くべき時ではないと思つたからである。

全部聞き終えて、横峰はもう一度溜息をついた。

「さつき、あの山にね……」

横峰はそれだけ言つと立ち上がり、禮夜達に教室に戻ること告げた。

禮夜は立ち上がつたが、由梨は立ち上がらなかつた。

「由梨。」

声をかけても反応しない。

それを見て横峰は禮夜に声をかけた。

「長瀬さんは少し保健室で休ませましょ。少し時間がたつたら私が教室に連れて行くので。」

「分かりました。」

それだけ言って保健室から出ようとすると、横峰が耳打ちをしていた。

「今日の朝に見たものは誰にも話さないよ。」考へていることも。もしも私が思っている通りだとしたらあの山について調べなければならないので。」

それだけ言つて、横峰は保健室のドアを閉めた。

禮夜は廊下にある窓から空を見た。今にも雨が降つてきそうな、どんなよりと暗い空だった。

帰り道を急ぎながら禮夜は考え方をしていた。あの山のことも、学校のことも、由梨のことも。

結局、由梨は教室に戻つてこなかつた。確かに由梨は血が苦手だつた。しかしあの反応は今まで見たことが無かつた。まるで昔、何かあったかのような…身内が傷つくようなことが。由梨の目の前で何かが起きたのだろうか。禮夜が知らないことが。

そうなのだとすれば、その記憶を思い起こしてしまったのだったら、血を見せるようなことをしなければよかつたのかもしれない。

もしかしたら助けなくとも大丈夫だったのかもしれない。庇う以外にも選択肢があつたのではないだろうか。

しかし過去は変えられない。過ぎてしまつたことはしょうがないのだ。

腕に冷たいものが当たる。いつの間にか雨が降つてきていたのだ。

禮夜は思考を止め、速足で家へと向かつた。

家に帰つた時にはずぶ濡れになつていて、急いで自分の部屋に戻る途中、居間にある日本刀が目に入つた。

禮夜の祖父、黒輝誠治朗くろきせいじろうが大切にしていた妖刀だ。禮夜はそれを少しの間眺めると、そのまま部屋に戻つた。

日本刀を見た時に何故か心が騒いだのを禮夜は感じ取つていた。

何だか今年の冬は暖かいですね。今のところまだ。

過(け)りやすいこと言(い)えばそれまでですが、何だか調子(じょうし)が狂(きょう)つよいな気がします。

次の日、いつものように学校に行くとなぜかみんなが騒がしかった。どうしてこんなに騒々しいのかと首を捻つていると、由梨がちょうど通りかかって、まるで昨日何事も無かつたかのようにこっちに声を掛けてきた。

「おはよ。ねえ由梨、なんかあつたの？」

「大変なの。河崎が昨日から行方不明だつて……」

「行方不明？」

禮夜は思わず聞き返してしまった。

別に驚いたわけではない。ただ、あまりにもタイミングが良すぎる気がしたのだ。このタイミングだと昨日の騒動の後にいなくなつたようにも思える。

何かあつたのだろうか？

「うん。警察は昨日のこと知らないから昨日のこととは結び付けてないらしいけど……でもなんだかみんな昨日のことと河崎は居なくなつたんじゃないかと思ってる。」

「まあ……普通はそう考えるよな。」

しかし禮夜にはそう思えなかつた。河崎が自分でいなくなつたとは思えないのだ。何か事件に巻き込まれた可能性が高い。

「とにかく学校中大騒ぎ。それと……今日は先生たちに何か言われる

かもしだれない。横峰先生が昨日のことうまく言つといてくれたと思うけど…でも分からぬ。もしかしたらほかの…何も知らない人たちに何か言われるかもしだれない。特に禮夜は…

そつ言つて由梨は下を向いた。気にしていよいよ見せていても、やはり昨日のことを引きずつているのだろう。

禮夜は少し笑つた後に由梨に話しかけた。

「大丈夫だよ。何を言われよつとも、それは心を持たない言葉。ボクの心には響かない。」

「でも昨日私があんな騒動を起したから…」

「それは禁句。」

禮夜は言葉を選ぶよつとしてから由梨に言つた。

「別にあれば由梨のせいじゃない。もともとボクがあの山にはいつたことから始まつたんだ。結局、自業自得だよ。」

その言葉を聞いて、由梨は禮夜を見た。さつきのような弱弱しい視線ではなく、今度は禮夜を射抜くような視線だつた。

「何で、禮夜は自分が傷つくことで他人を守らうとするの？自分のことは大切じやないの？」

禮夜は動きを止めた。そんな禮夜を、由梨は鋭い視線で見ている。それでも禮夜は身動き一つしなかつた。

まるで禮夜の周りだけ時間が止まつてしまつたようだ。

どれくらい時間が経つただろか？由梨がもう一度口を開こうとす

る。禮夜がやつと喋った。

「由梨。」

「…何？」

「……それも禁句だ。」

やつと禮夜が紡いだ言葉に由梨は声を上げた。

「何で？私は思ったことを言つただけ。何故それを聞く」とがいけないの？」

ずっと目を合わせていなかつた禮夜が、由梨の方を見た。禮夜の目を見て由梨はたじろいだ。冷たく光っている禮夜の目は、全てを怯えさせることのできる目だつた。刈る者の目。まさにそれだつた。

「まだ話す時ではない。」

禮夜はそつ冷たく言い放つと、いつも通りの表情に戻り、笑つた。

「じゃあ教室に行こうか。」

「あ、うん。」

禮夜と由梨は教室へと向かつた。

「……話す時が来れば…だけどね。」

禮夜の呴きは、由梨には届かなかつた。

四時間目が終わつた後の昼休み、由梨と話していると、数人の女子生徒が一人の元へやつてきた。全員気持ち悪いほどににやにやと笑つてゐる。

何を言いに来たのかはすぐに分かつた。

由梨がこっちを見て、どうすればいいかと目で訴えてきた。こいつらは無視するのに限る。由梨にそう目で伝えると、由梨は頷いた。向こうは何も話しかけてこなかつたため、禮夜達が無視して話し続けていると、しびれを切らしたのか向こうから不機嫌そうに話しかけてきた。

「ちょっと何無視してんの？」

禮夜はここではつきりと相手の顔を見た。そして由梨にもう一度目配せをすると、相手に話しかけた。

「何? こっちに用があつたのか? 何も言わないから分からなかつたよ。」

「ちょっと、そっちの立場分かつてる訳?」
「立場とか関係ないんじゃないの?」

由梨がそう返すと、向こうは田配せをして一人の席の周りを囲んだ。

「何？ちょっと痛い目見ないと分からぬの？」

そう言つと、向こうの一人が由梨に向かつて何かを投げた。かなりの近距離だったため、普通の人間なら反応することはできなかつたかもしけないが、禮夜と由梨はそこまで普通の女子生徒ではない。飛んできたものを自分の顔の前で受け止め、それが何なのかを確かめた。

「禮夜、これって…」

由梨に飛んできたものを見せられる。

「ああ、多分スタンガン。何でこんなもの持つているんだよ…」

そう、それはペントタイプのスタンガンだった。今の時代、普通にネットに防犯グッズとして売っているが、この辺は比較的治安が良いため、スタンガンなんて必要のないものだ。しかも、それを見てみると、ほとんど使われていないことが分かった。多分新しく買ったのだろう。

「げ、電源入ってる。掴む場所によつては氣絶するじゃん。」

そう言つて電源を切り、手で弄ぶ由梨。禮夜は、顔が引きつっている向こうを見据えた。

「何するつもりだったのかは知らないけど、もうちょっと後先考えた方がいいよ？…スタンガンは先生に渡すから。もう少しで授業始まるからさつさと自分の席に戻れ。」

有無を言わさぬ口調で命じると、案外素直に帰つて行つた。禮夜は

由梨からスタンガンを預かると、
横峰の元に向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089x/>

儀式の夜

2011年11月20日00時04分発行